

Ⅲ 支援の実際

1 支援の手順

特別な教育的支援が必要な子どもは、通常の教育だけでは十分に力を発揮することができず、「授業に集中できない」「仲良くしたいのにけんかになる」など、いろいろな課題を抱えています。支援が必要な状況はそれぞれ違い、一人一人の教育的なニーズに応じた特別な支援を必要としているのです。

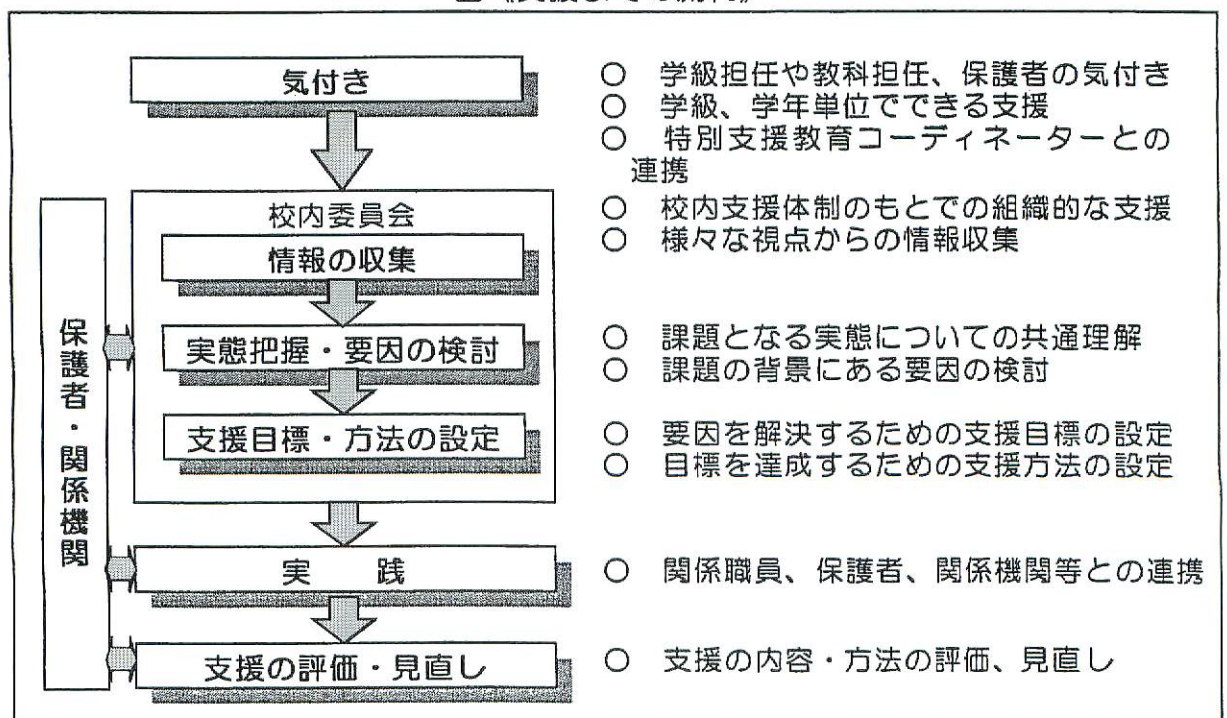
では、「このような子どもの教育的ニーズは何か」を見立てて実際の支援へとつなげていくには、どのようにすればよいのでしょうか。

子どもの問題のある行動の表面だけに注目すると、「やる気がない」「わがまま」と見えてしまい、子どもが意図的にやっているように感じられるかもしれません。行動の見方を「どうしてできないのだろう」という視点に変えて、子どもがなぜそのように行動しているのか、子どもの立場から検討し、その行動の背景にあるものを理解していくことが大切です。背景が分かると、子どもの求めているものは何かが見えてきます。

このように、適切な支援を行うには、子どもの課題の背景にどのような実態があるかを丁寧に把握し、保護者や関係者の理解を得ながら、支援の目標や方法を検討していくという手順が必要です。支援までの手順は、学校の支援体制によって違いはありますが、一般的には次の図のような流れが考えられます。

また、この流れにそって支援を検討していくことは、対象の子どもの個別の指導計画を作成することにもなります。子どもをよりよく理解し支援するためのツールとして個別の指導計画の作成にも取り組んでください。

図《支援までの流れ》



2 気付くことから始めよう

特別な教育的支援を行うには、まず、学級担任などの身近な教師が、子どもの出す学習面や生活面での様々なサインに気付くことが大切です。子どものサインを見逃してしまったために適切な対応が遅れてしまい、深刻な状況になってしまうこともあります。子どものサインに気付くことが特別な教育的支援のスタートと言えるでしょう。子どものサインに気付くためには、日頃から一人一人の子どもの行動をよく観察し、その行動の意味を考えようとする教師の姿勢が大切です。また、子どもの行動の見方についての研修会をしたり教師間での情報交換をしたりして、学校の職員全体が子どものサインに気付くことができるようにしておくことも必要です。

「がんばっているのにミスが多い」「すぐにカッとなる」など、子どもたちのサインは様々です。サインに気付いたら、その子どもの行動や前後の反応をよく観察し、記録をしておきましょう。後の校内委員会での検討資料などに生かすことができ、より適切な支援へとつなぐことができます。記録をすることで、サインの背景にある子どもの実態が見えてきて、支援の方法が明らかになる場合もあります。この時点で、担任が適切な支援をすることが可能な場合は、担任による支援を開始します。

気付きのポイントについて、次に示しました。

《気付きのポイント》

いろいろな気付きのサインに目を向けましょう。

子どもの行動から気付くサイン、担任が指導してうまくいかないことから気付くサイン、保護者からの情報で気付くサインなど、支援が必要なことを知らせるサインは様々です。「変だな?」「どうしてかな?」という担任の気付きを大切にして、サインの背景には何があるのか、その理由を考えるようにしてみましょう。

子どもを肯定的に見ることが大切です。

否定的な対応や不適切な叱責が重なると、子どもは低い自己評価や劣等感をもつようになり、自尊心を低下させてしまいます。子どもの行動を「怠けている」「わざとやっている」と見るのではなく、「何か理由があるから、仕方なくこのような行動をとっているのだ」と肯定的にとらえることが大切です。そうすることで、その行動の背景にある実態が見えやすくなり、支援の手立てにつなぐことができます。

目立つ子どもだけでなく、目立たない子どもにも、気付きの目を向けましょう。

席に着けないなど、行動上よく目立つ子どもは、支援の対象としてすぐに気付くことができます。しかし、一生懸命やっているのに学力が定着しない子ども、友だちのそばにはいるが一人で遊んでいる子どもなど、表面の行動ではあまり目立たなくても支援を必要としている子どももいます。「こんな子どもだから仕方ない」と断定しないで、何かの支援があれば状況が変わるのではないかという視点で、子どもの様子をよく観察してみましょう。

どのような視点で子どもを見るかによって、気付きは変わります。

一つの学級に特別な支援の必要な子どもが大勢いるという場合は、担任の学習や行動を評価する基準が高すぎるか、学級全体に学習や生活のルールが定着していないなど、他の問題があるかもしれません。反対に、一人もいない場合は、基準が低すぎるか、特別な支援の必要性に担任が気付いていないのかもしれないかもしれません。どのような子どもに支援が必要なのか、学校内で研修を行い共通理解を図っておくことが大切です。

3 情報の収集をしよう

各学校では特別支援教育コーディネーターが指名され、校内支援体制を構築し、特別支援教育の推進にあたっています。学級や学年で行う配慮・指導だけでは対応が難しいと感じる場合には、特別支援教育コーディネーターに相談しましょう。そして、校内支援体制のもとで、校内委員会を開催し、適切な支援についての検討を行います。

校内委員会でまず取り組むことは、情報の収集です。特別な支援が必要な子どもは、周りの環境や本人の状況などが一人一人違う上に、背景となる要因が複雑に絡んでいる場合もあります。そこで、適切な支援を行うためには、子どもが「なぜそのような状況になっているのか」、その背景を理解することが大切です。そのため、担任が把握している情報だけでなく、関係者等から様々な情報を収集し、実態を正確に把握する必要があります。

情報は、項目ごとに表にまとめて、関係者の間で共通理解が図られるようにしましょう。次の表に情報収集の例が示してあります。実態の把握は、個人のプライバシーに関わることなので、個人情報の保護に十分留意しましょう。

表《実態把握のための情報収集の例》

項 目		内 容
① 本人・保護者からの情報	支援のニーズ	○ 主訴、どんなことで困っているか、願いや要望 ○ 生育歴や教育歴、相談歴（検診歴、医療機関の受診歴）、学校入学前の情報
	家庭の環境	○ 家族構成、家族関係、家庭生活の状況 ○ 食事や睡眠の時間などの基本的な生活リズムの状況など
② 観察・関係職員からの情報	学習面	○ 好きな教科や得意分野 ○ 苦手な教科や不得意分野 ○ 学習の習熟度、作文や作品の状況、学力検査の結果
	運動面	○ 手先の運動の状況 ○ 体全体を使った運動の状況 ○ 運動の巧緻性、ぎこちなさなど
	生活面	○ あいさつ、食事、着替え、学習準備、教室移動、道具の使用などに関する状況
	行動面	○ しばしば見られる特徴的な行動 ※ 「いつ」、「どこで」、「どんなときに」、「何が」、「どのように」など、場面の状況も示す。
	交友関係	○ 交友関係の状況 ○ 遊びやコミュニケーションの方法などの状況
	性格の特性	○ 情緒面や考え方の傾向など
	チェックリストの結果	○ 「子どもと教師のための実態把握シート」（県教育研修センター版）の結果等
	入学前の情報	○ 保育所、幼稚園、小学校などからの情報 ○ 前担任からの引継ぎ情報
③ 関係機関からの情報	心理検査の情報	○ 知能検査の情報（田中ビネー検査等） ○ 認知能力検査の情報（WISC-Ⅲ、K-ABC等） ※ どの機関でいつ検査を受けたか、どのような助言を受けたかも記述する。
	専門機関からの情報	○ 障がいや病名等の診断や配慮事項 ○ 関係機関の利用歴